

一九八〇年代は発展途上国にとって、一次産品輸出価格の低迷によって対外債務が累積するなど厳しい経済困難の時代であり、それ故に「停滞の十年」と呼ばれた。しかし、そのなかでアジア諸国（ASEAN、アジアNIES）のみ高い成長を遂げ、飛躍の時代となった。八五年、先進五カ国のプラザ合意は日本に為替調整を強い、これが日本企業のアジアへの直接投資ラッシュを引き起こしたが、受け皿としてのアジア諸国もタイミングよく開発戦略を輸出指向へと転換したことから、直接投資をエンジンとした経済成長の好循環メカニズムが引き出されたのであった。

アジア地域において工業化の新たな波が到来している現実に注目し、何故にアジア諸国がテイクオフに成功しつつあるのか、それはどのようなメカニズムの働きに基づくものか、またどのような歴史的要因によって規定されているのか、こうしたアジアの経験を説明しようとの狙いのもとに、アジア経済研究所では八五年から「アジア工業化展望総合研究」プロジェクトを発足させ、国別、問題別に研究を進めてきた。九〇年度においては中国を対象とし、一年間、研究所内外の研究者の協力を得て「中国の工業化」研究会を組織してきたが、本報告書はその成果にほかならない。

八〇年代は中国にとっても、成長と飛躍の十年であった。経済改革と対外開放政策により、中国経

済は一〇%に近い成長と目覚ましい変化を遂げたが、これは過去三十年間の「内向き」(Inward Looking)の開発戦略から新たに「外向き」(Outward Looking)の成長メカニズムを見出し転換した成果にほかならないが、この新たな成長メカニズムを作動させる起爆剤の役割を果たしたもののこそ、従来の禁を破り導入された市場経済システムにほかならなかった。

その意味で八〇年代、中国は計画経済システムに代わる市場メカニズムに基づく工業化モデルの実験場として、世界の注目を集めた。だが八九年六月四日のいわゆる「天安門事件」の悲劇によって、その衝撃の大きさから、世界の期待は絶望に代わり、こうした実験は失敗に帰したかのようにみなされた。しかしこれは結論の急ぎすぎであろう。たしかに中国における政治改革は失敗したが、市場改革(市場メカニズムの導入)は一過性の実験ではない。市場経済に転化した東欧諸国の例は極端としても、市場メカニズムの活用は社会主義経済において単に多くの開発戦略のなかの一つの選択肢ではなく、もはや「共生」していかざるを得ないものとなつているといえる。実際に、九〇年代に入った現在、「天安門事件」後の現政権のもとにおいても改革と開放政策は継続されている。

本書の目的は、中国の工業化の歴史を紹介することではなく、過去四十年間の工業化経験を総括することを通じて、一一億人という巨大なスケールをもつ発展途上国として、さらに社会主義計画経済システムをとる国として、その工業発展のメカニズムを解明することに重点をおいている。そのため中国の工業化プロセスを、過去三十年間の伝統モデルの制約下の段階、八〇年代、新たなメカニズムへの転換期にある段階と大きく区分し、前段階の経験の総括を行ない、それを踏まえて八〇年段階の分析と今後の方向、課題を明らかにしようとするものである。

本書のサブタイトルを「揺れ動く市場化路線」としたが、これは計画と市場の狭間でジグザグコースを歩みつつある中国経済の現状を表現しようとしたものである。

本書の構成は、第Ⅰ章「中国の工業化論序説」において、過去三十年間の工業化政策とそのもとでのパフォーマンスについての分析を行なっている。中国の工業化政策がスターリン的集権的工業化路線と毛沢東的分権的工業化路線といった多くの顔をもつ特異性についても、その解明に力を入れている。

第Ⅱ章「一九八〇年代の工業化の諸側面」においては、八〇年代の改革と開放政策のもとでの工業化政策の分析である。それを経済管理制度、開発理論、産業組織論の各側面から、現状の紹介と分析を行なっている。

第Ⅲ章「開放政策と工業化」においては、まず八〇年代における対外開放化の中国経済に与えた影響を分析している。続いて中国の工業化における技術導入、直接投資の役割について論じている。ここではケーススタディとして中国最大の工業都市である上海の八〇年代における対外開放政策のもたらした成果と問題点、さらに外資系企業による上海での経営の実態について上海の研究機関に委託し、現地サイドからの視点を明らかにしてもらった。

第Ⅳ章においては個別産業のケーススタディを通じて、八〇年代の工業化政策の問題点を浮き彫りにしようとしたものである。自動車、電子の新興産業、鉄鋼、繊維の伝統産業が八〇年代の改革と開放の時代において、どのような構造変化、技術変化を遂げたのか、そのパフォーマンスの分析を通じて八〇年代の工業化路線の諸側面が浮き彫りにされている。

各執筆者の努力によって、一一億もの巨大な人口を抱える中国において、その工業化の過程はいかに複雑で、苦悩に満ちたものであるかという現状（リアリティー）を明らかにできたのではないかと思う。

最後に本書が刊行できたことに対し、各研究会メンバーの諸氏の努力と協力に深く感謝する次第である。

一九九一年三月

丸山伸郎

執筆者紹介 ● (執筆順)

丸山伸郎 ● アジア経済研究所経済協力調査室長

上原一慶 ● 京都大学経済研究所教授

栗林純夫 ● 東京国際大学経済学部助教授

木崎翠 ● アジア経済研究所地域研究部

横田高明 ● 中部大学国際関係学部教授

上海国際問題研究所、上海計画経済研究所、上海体制改革研究所

高山勇一 ● 現代文化研究所主任研究員

丸川知雄 ● アジア経済研究所在北京海外派遣員

杉本孝 ● 世界平和研究所主任研究員

岩崎博芳 ● 繊維総合研究所調査情報部主任研究員